

ぶぞうじきょうづか
武藏寺経塚



経塚とは、仏教教典を地中に埋納したところをいい、教典を入れた容器を経筒という。経塚造営は、末法の世に教典が失われる事を恐れ、弥勒菩薩出世のときまでこれを保存しようとする思想から始まった。

しかし、やがて極楽往生、現世利益などの祈願にかわっていき、当初の経典保存の趣旨は忘れられる。

最も古い経塚は、藤原道長が寛弘四年(1007)に造営した金峯山経塚である。

大宰府近郊は歴史的な重要性から四王寺山を中心に経塚密集地帯で、このなかで最も古い経塚は武藏寺経塚のなかの一つである。残念なことにその経塚は盗掘され、経塚も個人

◆ 4号経塚経筒出土状態

木炭で黒く染まった外容器は、経筒を保護するために逆さまに立てられている。長胴の頸のすぼまつた瓶形の容器である。

「さて、このような細身の外容器に納まる経筒とすれば、通例のものより一段と小さなものでなければならないが……」と考えながらよく観察すると、頸から最大径となる肩にかけて一条の割れがみえた。これは、経筒が大きすぎたため二つに割ってから被せたのであろう。

上の部分を静かに持ち上げると銅板製経筒が現れた。そして、とり囲む人の気配を感じたのか瑠璃がかすかに揺れ、筒身をめぐる金箔の帯が濡れた緑青のなかでキラリと光った。

今も鮮明な感動としてのこっている。

の所有となっている。その経筒には「武藏寺住僧頼暹が、寛治八年二月二日に法華経と般若心経を寺の南嶺に埋納した」と記されている。寛治八年は西暦1094年のことで、道長から遅れることほぼ90年である。

昭和40年頃に「武藏寺」の銘文がある経筒が盗掘されたことが話題となった。また、昭和43年には同所で偶然なことから経塚が発見された。まだいくつかの経塚の所在を考えられ、これを地中にそのまま保護していくには不可能な環境であることから発掘調査が計画された。調査は昭和43年4月と9月、昭和54年11月の三次にわたって実施された。

経塚の構造は、例えば11号経塚（図参照）

ではまず一辺150cm、深さ約80cmの坑を掘り、さらにその中に径約60cm、深さ約40cmの坑を掘る。下の坑の底に台石を据えて経筒を立て、木炭と灰をうずめて偏平な石材で蓋をする。上の坑を埋めもどす。地表には小さな盛土か何かの標識を設けていたものとおもわれるが、後世に削平されていてわからない。

発見された経筒は、鋳銅製積上式経筒と銅板製経筒の二種に限られている。

積上式は2、5、8号経塚の3本で、2号経塚は四段、他は二段である。また、5号経塚の筒身には「大治元年閏十月廿五日、勸進僧□□」の銘文がある。大治元年は1126年である。

銅板製経筒は3、4、9、11号経塚の4本である。いずれも銅板を鉢止めして筒身をつくり、蓋は銅板を四葉形あるいは八葉形に打出してつくる。縁辺に瓔珞を下げるための孔

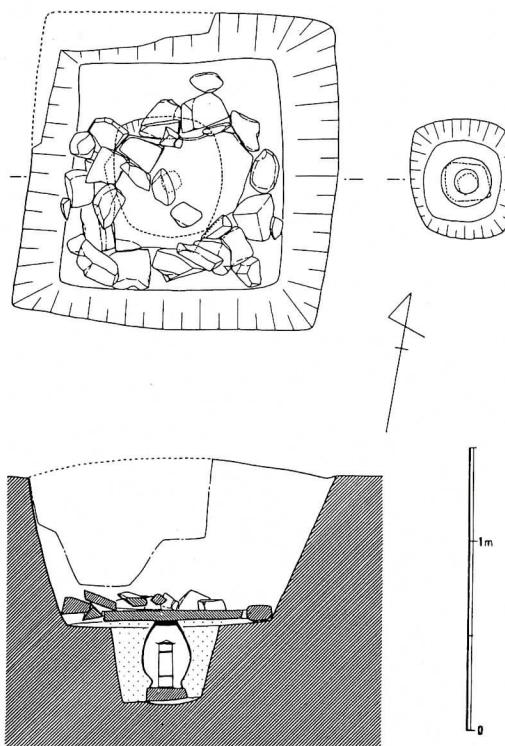


4号・5号経塚出土の経筒とその外容器
ある。瓔珞が垂下したまま出土したのは4号経塚だけであった。また、この経筒は筒身の上中下に金箔の帶をめぐらして有節式経筒をあらわしている。さらに、底には針書の銘文があるが線が細いことと鎔のため「母」
「入道」など僅かがよめた。

調査で7本の経筒が発見され、埋納の時期がわかるのは5号経塚の大治元年（1126）のみであるが、盗掘された個人所有の銅板製経塚には寛治八年（1094）の年号がある。また、積上式及び銅板製という経筒の形式を勘案すると、武藏寺経塚は11世紀末から12世紀中頃の間に造営されたとかんがえられる。

では、経塚造営の趣旨は何であったろうか個人所有の経筒には「弥勒出世」の銘文があり、納経本来の意味がある。また、4号経塚経筒の華麗さや銘文の母の字は、亡き母の追善供養であったろう。11号経塚は、経筒の蓋に一束の毛髪が添えられていた。自分の身の一部をこのようにすることは、御佛に守られて清淨な所にいたいとする願いであろうか。あるいは、弥勒菩薩の下生に值遇を得たいという切望からであったかもしれない。

（宮小路賀宏）



11号経塚（上は平面形、下は断面形）